

いつまで

加藤文子

ずい分前のこと。ジャクソン・ブラウンが五十代後半にスペインでコンサートをおこなった際録音されたライブアルバム「Love is Strange」のCDを編集者のKさんが送って下さった。Kさんから送られてくる様々なジャンルの音楽はどれもステキなものばかり。

長年にわたりジャクソン・ブラウンの良き相棒として数々の共演をはたしてきたデヴィッド・リンドレーがギターで参加している。信頼できる者同士が集うステージ、ゆるやかで楽しい様子がリアルに伝わってくる。

Kさんはジャクソン・ブラウンと同年代ということもあり、特別の思いを寄せて聴きつづけているのだそう。

「六十代を控えた今も輝きを失わない彼の音楽に励まされています」と、おっしゃっていた。そんなKさんも、七十半ばを迎えた今も現役でお仕事されている。「Love is Strange」は、私にとって



も木立を渡る乾いた風の中にいるようなすがすがしい気持ちにさせてくれる大切な一枚である。

同世代の人々が今をどう生きているのか、年齢がすすむにつれて関心が増している。キラキラした面持ちで努力を惜しまない姿に出会うとうれしくなる。

かつてコンサートやライブハウスに連れだつて出掛けた友たち……。本のこと、映画や演劇、ギャラリーや美術館、たくさんに触発され共有していた。その日々が、今日につながっている。

交流が跡絶えた友人たちも多くいる中、変わらず今もお親しくつきあえる友だちがいることを幸せに思う。おもしろがったり、感動したり、生きることをまじめに考えながら共通の思いを分かち合う。それは私の心を鼓舞してくれる大きな力になっている。

三十歳で独立した私は、さいたま市盆栽町の借家でささやかな盆栽園をはじめた。当時立ち寄つて下さる方々の中に、植物の貿易会社に勤務するKさんがいた。いよいよこれから、希望にあふれた年代のようにみえていたのだが、「とうとう四十歳になってしまいました。四十という響きになぜがっくりきて……」と、嘆いていたのを思い出す。

同じころミラノ在住のMさんから届いた手紙にも、四十歳を迎えて遣る瀟ない気持ちになつていくという主旨の事柄がつづられていた。

海外で望んだ仕事に就いて暮らしているMさんを羨望していた私には、どうしてそんな気持ちになるのか不思議に思えた。十年後の私はどんなだろうと……。

またたく間に月日は流れ、私にも四十代がおとすれた。しかし、特別な感想を抱いた記憶はない。四十歳を目前にしてある事情が突然生じ、那須へ移住したことが大いに関係したと思う。それは人生の中で大きな分岐点になった。移住を機に未知の事柄が次々に流入。必死なのとおもしろいのと緬い交ぜの毎日を送ることになった。年齢を意識する間もないまま五十代、六十代が通過していった。

気がつけば七十代に突入している。体力の衰え、思いちがい、容姿もすっかり変わった。そんな私を他人がどう見るかは別にして、がっくりもきていないし、淋しくもなくて、いまだに老人気分が湧いてこない。とはいえ、こんなこと思つて書いていることも、老人気分ではないかと、言えなくもない……かな？

七十八歳でこの世を去つた祖母は、六十代いいえもつと前からおばあちゃんと呼ばれていた。五十代で初孫が生まれ、それからたくさん孫に恵まれた。周囲の人からも、はなさんと名前と呼ばれることはほとんどなかった。日頃おばあちゃんと呼ばれて親しまれていると、しつかり気分もはまつていくのだろうか。孫のいない私には判らない。思い出に残る祖母はやっぱりおばあちゃんだ。

祖母の普段着は、行きつけの洋品店で揃えたアツパラパツとしたお年寄り独特のファッションで、グレーや茶系の地味なもの。うしろで髪を丸めたおだんご頭も変わることはなかった。庭仕事の時は、腰巻きひとつ、あるいはもんぺだった。

それでも特別な来客、外出、晴れの日にはうす化粧してシャツと着物を着こなす。着付けもはやくて、堂に入っている。会話の調子は下町ことばで、その物腰には年寄りの貫禄がうかがえた。こんな感じのおばあさんに最近出合う機会がなくなった。

母の七十歳ころを振り返る。私とは全然ちがう。祖母ともちがう。誂えのスイツにブラウスが外出着で、家ではタイトスカートやパンタロン風のズボンだった。ジーンズをはいたことはない。定期的に美容室へ通って髪を整えてもらっていた。美容室はサロンのようでもあった。明治、大正、昭和生まれ、それぞれ異なった時代背景が反映されているようにちがいがおもしろい。

私は半世紀以上ジーンズにTシャツやセーター、ほぼ同じパターンで過ごしてきた。数年に一度美容室へでかけるくらいで、いつも自分で切っている。カットの不揃いが目立たぬよう三つ編みにしている。

久々の美容室でカットが終わって快適な気持ちになって出る時は、年内にまた来ようと思うのだが、実行できたためしがない。植物を追いかけているうちに日々は過ぎている。年を問われて答える自分の発した数に思わずヒクツとすることはあっても、植物も音楽も、好きでいたいものも、キレイなものを感じていたいこの気持ちも、この先も変わらないような気がする。

そんな自分の意識をいつまで保って生きていけるだろう。人生が終わるころ、私は何を見ているだろうか。



いつのまにか 仲間がふえている。
盆養30年 ハニーサックル 源平小菊 三時草 他